魔女

桜の園

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔女

【Ｎコード】
Ｎ４７５０Ｔ

【作者名】
桜の園

【あらすじ】
主人公，姫宮　一磨
彼は小さい頃に魔女と約束した一磨
その約束は叶えられるのか？

魔女（前書き）

初？の続編です！！
よろしくお願いします

魔女

この世界には絶対魔女はいる！！僕はそう思った
でも皆，「魔女なんて架空の人物だ」と言う
例え皆が言ってもずっと信じて来た
この１７年間・・・・ずっと
僕の名前は姫宮　一磨（１７）　桜咲学院の２年
「何で魔女はみんなの前に姿を現さない訳？」
そしてため息一つ
「よう！一磨」
「・・・あぁおはよう健太」
こいつの名前は葛城　健太（１７）　僕と同じ２年
「また魔女で悩んでいるのか？」
「あっ，うん・・それで色々考えていて」
「どんなこと？」
「何でみんなの前に姿を現さないのかって」
「そりゃあ・・魔女を信じてないから？」
「そう・・なの？」
「あぁ，・・あ！ほいコレ頼まれたもの」
「ありがとう！！でも健太のおじいちゃんがよく許してくれたね」
「あぁじいちゃんに一磨のことをはなしたらいいってくれた」
「へぇ～本当に感謝してもしきれない！！」
「おう！じいちゃんに言っとく」
「うん」
健太から借りたのは魔女に関する本なのだ
健太のおじちゃんはとっても魔女に詳しい人
だから協力してもらった
魔女の真実という題名，魔女を信じなき者には虫のいい話でも魔女を信じている者には心温かき話

僕は昔幼い頃の自分
公園で砂遊びをしていた時自分の前に一人の影があった
そして影の正体である女性は自分に言った
「少年よ・・己はずっと魔女を信じよ・・さすれば己の願い叶えようぞ」と言って姿消えた
自分の願いを叶えてもらいたいそいう思いで信じて来た
その願いは両親を死後の世界から呼び覚ますことだった。

魔女（後書き）

感想など書いてくれたら嬉しいです

信実の魔女（前書き）

台詞から始ります

信実の魔女

「それでさぁ・・・って聞いているのか？一磨！！」
「えっ・・あぁ何だっけ？キムチとマヨは絶妙！だっけ？」
「違うって！てか俺両方嫌いだし！！だ・か・ら2年5組の目崎って可愛いくない？って話！」
「あ～ぁ目崎ね・・可愛いんじゃぁない？好みも人それぞれだしさ」
「本当に一磨って女に興味ないよな～いい男が台無し」
「別に健太には関係ないだろう！先に行く・・・」
タッタッタ・・・・タッタッタ
「そんなに怒らなくても・・・・」
その後俺は学校の階段を一気に駆け上がり屋上に行った
そして手に持っていた【信実の魔女】を読むことにした
「えっ～と魔女はとっても寂しがりあなのです。だから人間に悪戯をして自分の物事を伝えようとするのです。・・・なぜ魔法があるのに魔法事態を使わないのか，と思うかと思います，でも魔女にも優しさがあり人間なのです。か・・？これどっかで・・・・」
キーンーコーンーカーンーコーン・・キーンーコーンーキーンーコーン
「うわっ・・・2次元目終わったちゃか・・もういいや今日は授業でずにここでサボろ」
こうして俺は授業に出ずに信実の魔女全１５０００ページを読んでいてそしていつの間にか寝てしまっていた。
（一磨・・目覚めよ・・願い叶えよ）
「ふぁ～何だったんだ・・・さっきの夢」
「ここに・・居たのか・・探したっぞ！屋上で何を・・みんな心配していたのに」
「健太のおじいさんの本を全部読んでたんだ」
「嘘？！こんな厚いといえないほど厚すぎるこの本・・ページ確か

１４９９９・・」
「１５０００！！・・あと色々迷惑掛けてごめん！！」
「別に・・てか俺の苦労は一体・・・・・・・・・・・・・」
「あっ・・・あのさこの本もう少し借りてもいい？」
「！！・・・もちろん！何で？」
「この本昔読んだことあるような気がして・・だから調べたいんだ！！」
「そっか・・じじいに言っとくほんじゃあ帰りますか！！」
「おう！」
こうして健太と帰り家についた俺は信実の魔女について調べつくした・・・。

信実の魔女（後書き）

キャラが崩壊したかも・・すいません

信実（前書き）

久々の投稿です！

信実

俺は家に帰ったあとずっと【信実の魔女】について調べてみた
次の日の朝
「あった！やっぱり祖父ちゃんの本だったんだ・・・」
祖父ちゃんの本とは・・・・・１０年程前
「祖父ちゃん！祖父ちゃん！いつもの本読んで！！」
「お前さん本当に好きじゃのー信実の魔女」
「じんじつのまじょ？魔女は居るもん！！一磨はずっと信じているもん！！」
「お前さんには魔女が見えるのか？」
「うん！一磨見たんだよ？魔女！それでね約束したの！」
「約束とは何だ？一磨はもう幸せだろに・・・」
「幸せじゃあないもん！！パパとママが居ないもん！・・・・・・」
「すまんな・・一磨は強い子だから一人でも大丈夫じゃろう」
「強くなんかない！祖父ちゃんは一磨から離れないよね？」
「・・・・・すまんな一磨」
そして，夜なり祖父ちゃんが倒れて病院へ行きそのままこの世を去った
俺は施設に預けられそのまま7年経ちやっとある人に拾われた
そして今の生活だ
「この本，微かに祖父ちゃんの匂いがする・・１０年も経つのに・・」
俺は嬉しさと悲しさを抱えながら学校へ登校した
「よう！一磨昨日どうだった？いいこと分かった？」
「うん！一つだけ・・この本の作者姫宮　竹蔵つまり・・俺の叔父に当たる人」
「まじかよ！！じゃあその本一磨が持っていたほうがよくね？」
「ううん・・・いいんだ別にわかっただけでも嬉しいから」

「そっか・・じゃあ今日家に来ないか？」
「えっ？いいの～！！健太のおじいさんに会ってみたかったんだ」
「じゃあ決まり！放課後家に行こうぜ！！」
「うん！分かった！じゃあ教室に行こう？」
「おう！」
時は経ち放課後
「よ～し！じゃあ行こうぜ！」
「うん」
家に着き健太のおじいちゃんが帰って来るまで色々な話をした
「お～い！！帰ったぞ～！」
「お帰り！紹介する前に話した姫宮　一磨」
「始めまして姫宮　一磨です！」
そして俺の前に居た人は御祖父ちゃんだった。

信実（後書き）

変な展開ですねwwww

竹蔵と竹彦（前書き）

いやー困ったもんだ！
今日なかなかログイン出来ずじまい！
ｗｗｗｗ

竹蔵と竹彦

何で死んだはずのじいちゃんがここに？
俺はとても嬉しいはずなのに素直に喜べなかった
「ん？どうした一磨！」
「なっ・・・何？」
「さっきからずっ～と固まっていたぞ？」
「ごめん・・何かさ健太の御爺さん，俺の祖父ちゃんに似ていてさ・・あはははは」
「うーん・・・どっから説明すればいいかな・・」
「えっ・・ど，どういうことだよ！」
「実は・・一磨が祖父ちゃんの話している時の内容がさ・・俺の祖父ちゃんだと分かった時の話が一致するんだよな・・・何か」
「い・・意味が分かるわけないだろう！！なっ・・何で今更？！」
「すまん・・・言おうか迷ったんだ，このことを言ってしまえばお前が傷つくって思って」
「無駄な心配有難うございました！！ですがそんなこと結構でございます！」
「何怒ってるんだよ・・」
「当たり前だろう？俺は・・・俺は祖父ちゃんが死んだとしか聞いていなかった！もし健太の言っている事が本当なら・・親戚の人に嘘付かれたことになる！！とても優しい人だったのに・・」
「ごめん・・でも俺の言っていることは本当かどうかも分からないんだ」
「今更，何言って・・」
「話の途中で悪いが一磨君，君の御爺さんの名前は？」
「えっ・・姫宮　竹蔵ですけど・・・何か？」
「竹・・・・・蔵？兄さん・」
「えっ？お兄さん？あの・・お名前は・・」

「竹彦じゃよ・・・」
この名前には聞き覚えがあった
昔じいちゃんが大切にしていた写真の左側に写っていた人だ
じいちゃんが言っていた【この人はじいちゃんの兄弟なのんだ】と
「竹彦さん・・・おじちゃんが死んだ原因はご存知ですか？」
「心臓病だよ・・きっと苦しんで生きていただろうな」
どういう意味だよ・・それじゃまるで俺が居たから・・みたいに聞こえる
「おい！じじい！！テメェいい加減にしろよ！！一磨に謝れ！」
「おっ・・おい！健太止めろって！！」
「ヤダ！止めない！だって自分の友達が嫌な事言われているのに我慢しろって？出来るわけあるか！」
「健太・・ごめんなさっきは言い過ぎた！じゃあ俺帰る！！ここに本置いとくから失礼します！」
俺は泣きながら健太の家を出ていった

竹蔵と竹彦（後書き）

まっく変な展開になりました

魔女現る！！（前書き）

ついに魔女が出てきます！！（パチパチ

まぁ今回も暖かい眼で見てください

魔女現る！！

俺はその後泣きながら家に帰った
泣きすぎて赤く腫れた眼，酷い顔俺は部屋に引き篭った
【ここは？海？何で海の中に居るんだ？】
『一磨・・我の手を・・・・・』
【手？あなたは一体？】
『早く・・・早くこの手を取るのだ一磨！！』
【・・・・・・わかりました】
そして見知らぬ人の手に自分の手を伸ばした
『あぁ愛しの我が子・・・一磨よ』
【あなたは・・・あの時の魔女？魔女なんですか！！】
『うむわらわこそ魔女ルナ・ドラグレス』
【ルナ・ドラグレス・・・やっと】
『わらわも一磨に会いたかったぞ・・・・でも』
【でも？・・・うっまって！まだ・・】
とても深い深い海の中に落ちていった
「うわ！！はっはっ・・・ここは？」
「一磨！やっと起きたのね・・」
「お母さん？どっ・・どうしたの？泣かないで」
「だって・・一磨が一週間も寝たままだったんだもん」
「えっ？いっ・・一週間？！だって！！今日何日？」
「今日は・・・６月１８日よ」
「本当だ・・一週間だ」
「しかも一磨の眼真っ赤に腫れているし一体何があってこんな事が起こったの？」
「実は・・・」
俺は６月１１日にあった事全て話した
「そう・・辛かったわよね・・・よし！お母さん何でも相談に乗る

わ！！」
「いや・・・・遠慮しときます」
「そっか・・・わかった！でも無理はだめだから」
「分かった。お母さん色々ありがとう！寝てないんでしょ？俺は寝すぎたからちょっと散歩に出かけて来る」
「分かったわ・・・まだ眼が腫れているからサングラスして・・いきなさい」
「うん，お休み」
「ｚｚｚｚｚｚｚｚ」
俺はある場所に行くことにした
「行ってきまーす」

「何かこの風景久々って感じする」
ふぁ～
「？！何今の・・・・どっかで・・・・」
「一磨！一磨じゃあないか！！」
「あっ！健太」
「どうしたんだよ～一週間も休んで・・鬼の桜井も心配してたぞ～ｗｗ」
「あの鬼の桜井が？！まじか～見てみたかった」
「ふふふ・・そう言うかと思って写真を撮っときました～」
「まじで！！神様！仏様！健太様～」
「ははは！苦しゅうない苦しゅうない！！」
（一磨・・・一磨！！）
「えっ？誰？」
「おい大丈夫か？」
「えっ・・・聞こえないの？」
「さぁ～俺には一人事にしか見えないけど・・」
「・・・・ごめん！！用事思い出した！じゃ！」

「えっ・・・おーい！行っちまった」
「ねえ・・もしかしてルナ？」
（うむ，そうじゃ）
「何で俺の体の中に？」
（実は儀式に失敗してしまって・・）
「だから俺の中に？」
（そうじゃ・・すまぬ）
「あやまらないで？」
（やっぱりその優しさは変わらないな・・・一磨は）
「どこかで会ったけ？」
（こっ・・・こっちの話じゃ）
「そう？じゃあいいけど・・・もう家に帰るか」
（うむ，帰ることにしよう）
こうして俺とルナの生活が始まった・・・・。

魔女現る！！（後書き）

初めての登場！！（よっ！！
鬼の桜井とは・・一磨たちのクラスの担任
どこもかしこも真面目な性格です
これから何回か出てきます

生活（前書き）

色々動きだしました！
まぁ頑張って行きます

生活

俺の体に入って来た魔女ルナ・ドラグレス
何かの儀式に失敗してしまい姿をなくしてしまったらしい
「ねぇルナ．昔の約束覚えてる？」
（ちゃ・・・ちゃんと覚えているぞ・・。）
「よかった・・じゃあいつ叶うの？」
（わらわの姿が戻れば・・・多分）
「じゃあ俺も手伝うよ」
（感謝するわらわの本当の名前も思い出したい）
「えっ・・ルナ・ドラグレスが本名じゃあないの？」
（うむ，魔女になる代償が本当の自分だからな）
「そっか～何か手がかりは無いの？」
（よく分からないがわらわには子が居った）
「子供？男の子？女の子？」
（男の子だったかな？）
「ふ～んそっか・・今何時？！」
（夜の7時じゃあが？）
「7時？！ご飯作らないと・・・」
（ご飯？そう言えば最後の晩餐はもう何年前かの）
「悲しいこと言うなよ！」
（ふふふ・・すまぬで，何を作るのじゃ？）
「う～ん材料からすれば・・餃子・シュウマイ・麻棒豆腐かな」
（ギョ？シュ？マ？何だその料理・・）
「もしかして知らないの？！」
（し・・知らぬ・・その料理一磨が作るのか？）
「うん！手作り！！」
（うまいのか？）
「すっ～ごく美味しいよ！」

（そうか）
「ふぁ～良く寝た」
「あっお母さん今晩御飯作っているから椅子に座ってて」
「あっごめんで今日の晩御飯は何？」
「中華料理」
「本当？！うぁ～い！！」
「・・・・よし出来た！！」
「いただきます！」
～食事中～
「ごちそうさま」
（うむ，美味かった。）
「じゃあ９時頃風呂に入るから」
「分かったわ」
（行くぞ）
「うんあっ・・ねえアルバム見よう？」
（一磨のか？）
「そう！もしかしたら何かあるかも」
（そうか！なら早く見よう！！）
「はいはい落ち着いて」
（落ち着いている！！早く！早く！）
「えっーと・・あった！小さい頃の奴」
（子供の頃？あの時の一磨か懐かしいの～）
「あっ！お母さんだ・・・」
（一磨の母親か・・似ておるな）
「でしょう？お母さんはとても優しい人だったな・・」
（一磨・・すまぬ，）
「何で謝るの？悪いことしていないの？」
（あっ・・・いや何でもない）
「そう？だったらいいけど」
（一磨．もう９時だが）

「えっ?!もうそんな時間?!お風呂入らないと」
(じゃあ動くなよ・・・・えい!)
「えぇーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー!!」
(止まれ!)
「とっ・・・止まった・・・」
~入浴中~
「ふぅ・・・いいお湯だった」
(じゃな)
「もう寝るか・・・お休み」
(うむ)
その後また変な夢の中だ
『桜?今の季節は違うけど』
(多分桜の園だと思う)
『桜の園?何でココにいるんだ?』
(また夢の中かな)
『夢の中』
「おかあさーん!!おかあさーん!!どこ?返事してよ!!」
「ここよ~一磨!こっち!こっち!」
『えっ!あれは昔の俺?!』
(そして隣にいるのは・・・誰?)
『あれは・・・お母さんだよ』
この夢は自分の過去の夢だった

生活（後書き）

自分のユーザーネーム出しちまった・・

もどって来た魔力（前書き）

いよいよクライマックス編かな？
まぁよろしくです！

もどって来た魔力

この場所覚えがある
たしか5年前，ちょうどお母さんが居なくなった頃の記憶だ
とある山の奥にお母さんと最後に行った場所でもある
【お母さんー！何処？何処に居るの？ねぇ返事して・・・よあかあさーんうわぁぁぁぁぁん】
【こっち・・・・かず・・・ま】
〔・・・・・・・・。〕
「そのあとお母さんが行方不明になったんだ」
〔そうか・・・・そろそろ時間みたいだ〕
「時間？うぐっ・・・・うっ」
〔大丈夫だ・・たんなるタイムリミットだから〕
ちゅんちゅん・・・・ちゅん
「ふぁ～・・寝不足かも」
〔しかたなかろう過去の夢を見たんだし〕
「たしかに・・・なぁルナお前何か思い出したのか？」
〔なぜ〕
「いや・・・なんとなく？」
〔そうか・・・学校行かなくっていいのか？〕
「？今何時・・・って8時！！あと１０分で遅刻！！」
〔じゃあ魔法使うか？〕
「昨日のびゅーーーーーーんってやつ？！」
〔ご名答！えっい！！〕
「おっ・・・おいうわぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーやめろ！！」
〔ここか？一磨？〕
「そこ！ストーーーープ！！！！」
〔止まれ！！〕

「し・・・・死ぬかと思った・・・今何時だ?!」
〔8時00分50秒〕
「1分も経たずに来るなんて」
「一磨どうした?!ついに神になったか?!」
「違うよ!!それより教室行こうぜ!」
「たぶらかしやがって~行くか!!」
〔魔法を我に・・・・・・〕
「うわ!何だ?!この光は!!」
「ルナ!ルナー!!」
また一人なのか?そんなの嫌だ・・・・。
「なぁ一磨!!大丈夫か?上の空だけど?」
「何でもない」
「そうかー?それより今日転入生が来るんだぜい?」
「へぇーどこのクラス?」
「俺たちのク・ラ・ス☆」
「ふーんキモッ!!」
8時10分　ホームルーム
「転入生を紹介する。入れ」
ガラっ　そしてそこに居たのはルナだった
「自己紹介をしてくれ」
「はい,はじめまして姫宮　ルナです!よろしくおねがいします。あと一磨兄さんがお世話さまです」
「じゃあ姫宮兄の隣」
「はい」
「意味分からない!!俺妹なんて・・・・」
「一磨何を言っている」
「あぁやっぱりルナだったんだ!どうしたんだその姿」
「実は昨日の夜に魔力が半分もどってな」
「人間に化けたと?」
「まぁ人間たちの記憶をいじった」

「はぁ?!意味分からん!!」
「うるさい」
「て，ことは記憶も戻って来ているのか?!」
「まぁ・・・な」
「?」

もどって来た魔力（後書き）

です！！

事実（前書き）

この作品を含め2～3話位で完結したいです

事実

キーンコーンカーンコーン・・・キーンコーンカーンコーン
お昼
「昼，屋上行こう？」
「うむ・・・・一磨さっきからいたる所から視線を感じるのだが・・・・。」
「しらねー早く行こうぜ！！お腹すいたし」
【ねぇルナちゃん？コイツより俺と食べよう？】
「・・・すいませんせっかくのお誘いなですが断らせていただきます」
【そ～んな！！・・・・・一磨俺は・・俺は・・燃え尽きたぜ」
「あっそじゃあな健太」
「失礼します」
屋上
「そーいえば弁当はあるのか？」
「ない」
「即答かよ！！・・・まぁいいや弁当食えよ」
「いいのか？・・・・いいただきます」
もぐもぐ・・・もぐもぐ
「おいしい・・・・何か懐かしい味・・何んだコレ？」
「えっ・・・懐かしい？あとそれはギョーザと焼売」
「ちょっと前に食べたとてもおいしいけれど代償に口の臭いが臭くなる食べ物」
「じゃあ食べ終わったあとブレスケヤ食べれば？」
「お前はどうしてそんなに不思議な食べ物を・・・・いや何でもない」
「よっと・・・・あぁ～いい風」
「たしかに・・・・。」

「♪風が吹けば～花も喜び・・・・・・」
「風鈴も鳴り響く日常」
「知っているのか？！この曲・・・・・・」
「知らない・・けど頭の中で流れてくるんだよ」
「この曲はお母さんが小さい頃に聴かされた曲なんだ」
「そうか・・・・うっ」
「おい！大丈夫か？！」
その後ルナは倒れてしまった
急いで保健室へ連れっていた・・・。
「先生！助けて下さい！！！！！！！！！！！！！！！」
「早くベットへ」
「さっき屋上で昼飯食べ終わって寝転がりながりながら歌っていたら倒れて・・・・。」
「そう，分かったわ妹さんが目覚めるまで付き添ってあげて」
「でも授業は？！」
「大丈夫！あたしから先生に言っておくから」
「お願いします」
「じゃあ何かあったら職員室までコールして！じゃあ」
「大丈夫だよな・・・きっと魔力の消耗が激しいだけだよな？」
「うっ・・・・一磨ごめん許してお母さんを・・・」
「えっ・・・・どういうことだよ」
その後あの言葉を発したあともルナが目覚めるまでまって居た俺だった

事実（後書き）

こんな感じでいい展開にしていきたいです

一磨の願い（前書き）

完結する気です
でももしかしたら次あるかも

一磨の願い

あの日以来俺はルナを何故か避けてしまう
理由はもちろんあのことをずっと黙っていたこと
ルナが眼を覚ました時聞いた全てを・・・・・・・・・。
「ルナ今から聞くことは正直に答えてほしい」
「わかったイェスかノーで答える」
「ルナの正体は・・・俺のお母さんなのか？」
「・・・・・イェス」
「いつ頃から記憶は戻ったの？」
「あの時の夢から」
「過去の夢？」
「イェス」
「何で・・・隠していたの？ずっとお母さんは死んだって聞かされてた」
「ごめん・・・一磨許して」
「・・・・・・・・考えさして」
あの時の会話ヤバかったかな
「一磨・・・・おは・・」
「・・・・・・」
いつもああだ
自分でも最低な行為だと分かっているのについ行動に走っている
昔の願いはあきらめるか
「一磨・・・放課後話があるの屋上に来て・・・・ずっとまっているから」
「無理」
また無神経に言っちゃったごめんなルナ
そうして時間が経ちきずけば放課後になっていた
「帰るか・・・・・やっぱり覗くだけなら」

今に思った自分は矛盾だらけの最低野郎だって

「んっ？まだ居たのか・・・しぶといな」

「あぁ！！やっと来てくれた！！」

「話って・・・・何？」

「過去の話・・・昔ね一磨をおじいちゃん預けて私とお父さんは旅行に行ったの」

「ふーんだから？何が言いたいの？」

「事故にあったの私たちが乗っていた車が・・・崖から落ちてしまって」

「行方不明か・・・で？」

「お父さんが私を庇って死んだの・・・そのあと森をずっとさまよい続けたの」

「それだけ？」

「あと魔力が全て戻ったのだから死者を・・お父さんを蘇らせる」

「本当か？！」

「ええ・・・じゃあ離れて」

「おぉ」

「・・・今この場に5年前亡くなった姫宮　隼人を蘇らせる！！」

【ルミナス聖アンジュよ我に力を！！天からの贈り物を・・・♪～】

ピカーン！ジュドーーーーーーーーーーーン！！！！！！！！！！！！！！

「うおーーーーーーーーー！！」

「成功したの？」

「父さん？どこ？返事をしてくれ」

「何だ懐かしい声・・・一磨？真理子・・・なのか？」

「お父さん」

「う゛っ・・・・・」

ドサッ

「真理子！！真理子」

キラ・・・・・
「光が・・・・・」
俺は一瞬思った次は母さんが居なくなると
でも違う魔女が消えるだけで母さんはず～とそばにいてくれる
昔から願っていたことは本当に叶ったと言うこと・・・。

そしてどんなに年が流れていっても思いは負けない
必ずいつか叶う時が来るとを永遠に未来永劫来世の先の先まで言えることだ

一磨の願い（後書き）

ついに初完結！！
ありがとうございました！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4750t/

魔女

2011年10月9日02時04分発行